

# 野生鳥獣の農産物被害について

## ～被害全体は縮小傾向に

農水省は野生鳥獣による農産物被害の推移を発表した。令和3年度は合計3万3,300ha、被害金額にして155億5,160万円となっている。洒落では済まされない数字となっているのだが、これでも被害面積および被害額は年々と減少傾向にあるようだ。図の内訳をみて見よう。農家目線で最大の敵は獣類ではシカ、鳥類ではカラスがいずれも被害額の約半分相当を占めている。次点で鳥類ではカモ、獣類でイノシシだ。シカ

の被害は平成24年から減少傾向にあったが、再び被害は緩やかに増加傾向となっているようだ。全国的にもシカが増えている報道を耳にしているがどうも相関関係がありそうだ。カラスは未だかつて筆者も口にした事はないが、シカやイノシシ、カモはジビエと称した料理で熊本の通潤橋に近い山里の宿に泊まった時におよばれた事がある。その村ではヒト

の人口よりもシカのほうが多くいるよと宿のオーナーが教えてくれた。動物たちが山での食べ物が少なくなった結果、里に下りてきて行動範囲を拡大しているのか、適正な駆除が出来てないのか、はたまた山間地にヒトが侵食し過ぎた結果だという表現が正しいのか判断がつかない。いずれにせよ、農家目線で言えば丹精込めて栽培しているのをみすみす食べられているのだからたまったものではない。カラスやスズメはとてども狡猾だ。福島県の浜通り地域で震災後に飼料用米の乾田直播を試したことがあったのだが、カラスやスズメは電線の上で何食わぬ顔してとまっている。イネの種子を播き終わると一斉に下りてきてほじくり返してついばんでいる！とても小さな頭なのにヒト様を小ばかにする行動が気に食わないのだが成すすべなし。その試験圃は見事に共済対象となってしまった。直播栽培は地域で一番早く種まきをすると鳥類の餌食と化するのだと身をもって体験した次第だった。岩手の中山間地でイネの生育調査に伺った際にはイネの若い葉が倒れたりちぎられていて驚いた事がある。これは何の仕業かと農園主に聞くとシカの被害だという。電気柵を張ったとてシカは飛び越えて来るのだという。続けて農園主は田植えからまだ中干し前なのに既に6頭もシカを仕留めたという。周囲はスギ林に囲まれていて電気柵を張っていても飛び越えてくるようじゃシカに食べてくださいと言わんばかりのところまで植えているのだから仕方ないよねと、口に出そうになったが流石に踏みとどまり黙るしかなかったのを鮮明に記憶している。山梨の準高冷地畑でもシカの食害を受けた圃場を見た事がある。夜のうちにせっかく植えたキャベツやレタスの若芽だけを狙って食べている。足跡も残っており見事なものだ。やはり、日中には畑に来ないのだそうだ。動物達もやられたくないのが良く伝わる。農家もやられたくないために発砲音を出したり電気柵を張ったり動物が嫌であろう臭いを畑の回りに

野生鳥獣による農作物被害の推移（鳥獣種類別）

（単位：千ha、百万円、%）

		令和元年度		令和2年度		令和3年度		
		面積	金額	面積	金額	面積	金額	シェア
鳥類	カラス	2.3	1,329	1.9	1,379	1.6	1,313	46.0
	カモ	0.4	450	0.4	513	0.3	546	19.1
	ヒヨドリ	0.8	602	0.6	391	0.4	345	12.1
	スズメ	0.7	236	0.7	213	0.4	190	6.7
	その他鳥類	1.3	524	1.1	520	1.1	461	16.1
	小計	5.5	3,141	4.7	3,016	3.8	2,855	100.0
獣類	シカ	33.8	5,304	29.7	5,642	22.1	6,097	48.2
	イノシシ	5.5	4,619	5.2	4,553	4.2	3,910	30.9
	サル	1.0	860	0.9	855	0.7	752	5.9
	ハクビシ	0.4	405	0.5	434	0.4	361	2.9
	クマ	0.8	404	1.0	460	0.8	438	3.5
	その他獣類	1.4	1,068	1.0	1,149	1.4	1,103	8.6
	小計	42.9	12,660	38.3	13,093	29.6	12,661	100.0
合計	48.4	15,801	43.0	16,109	33.4	15,516		

出典：農水省HPより

（次ページへ続く）

(前ページより続く)

着けたりして対策はしているのだが動物達は慣れてしまうと意に返さずだ。ヒトが作物を植えると空から陸からお構いなしに動物達は生きるために襲ってくる。このヒトと動物たちのイタチごっこはヒトが耕作を諦めない限りは永遠と続くのであろうか。

## 真冬の豊作祈願伝祭事 「八戸えんぶり」

今回は、筆者の地元青森県八戸市の祭事についてご紹介します。筆者の地元では毎年2月17日から「八戸えんぶり」が催されています。伊勢の神宮の宮中祭祀「祈年祭」に合わせる形で開催されるこの「八戸えんぶり」は、その年の豊作を祈願する伝統芸能です。きらびやかな烏帽子をかぶった太夫(たゆう)と呼ばれる男たちが、●(えぶり)と呼ばれる鈴で装飾された農具を持ってお囃子に合わせ舞いを披露するお祭りです。「えんぶり」の語源はこの「えぶり」が訛ったものと言われております。舞いは稲作を表現しており、田起こしから田植え、収穫までの一連の動作を表現しています。手拭いと扇子を苗に見立て、腰を落としながら苗を一つ一つ植える田植えの舞いを見ると、いかに手作業の稲作が重労働であったか痛感させられます。また、演目で太夫たちがしきりに「えぶり」を振りながら鈴の音を鳴らし大地に眠っている神を揺さぶり起こす場面がありますが、ここでは日本ならではの自然崇拜の文化、自然に対する尊崇と畏怖の念を垣間見ることができます。寒い雪の積もった神社の境内で、焚火に照らされながら金色の烏帽子を輝かせ、笛と太鼓の音とともに鈴をなびかせ舞う姿はとても幻想的です。その他にも恵比寿舞いや大黒舞いなど七福神にまつわる縁起の良い演目があり、主に小さな子供たちが舞いを披露します。恵比寿様が面白おかしく鯛を吊り上げる場面はいつも歓声があがり観客を楽しませてくれます。新年の福呼びにはぴったりの演目ですね。あいにくここ数年はコロナウイルスの影響により、一般公開を自粛していましたが、2023年は一部再開するそうです。青森の冬は大変寒いですが、皆さんもぜひ一度は八戸にお越しになって「えんぶり」をご覧になってみてはいかがでしょうか。(原料グループ) ●=木へんに八



## 郷土の味がどうなるか 食品衛生法改正により漬物がピンチ！

ポリポリと小気味よい歯ごたえとスモークの香りがたまらない秋田県を代表とするソウルフードのひとつ「いぶりがっこ」がピンチとなっている。先日、秋田の山間部に訪問した際に農園主に聞いた「いぶりがっこ」の現況をご紹介したい。「いぶりがっこ」をはじめ、家庭レベルで漬けて販売されてきた野沢菜などが2021年6月に改正された食品衛生法で製造の際に営業許可が必要となったのは読者の皆様ご存じだろうか。この改正食品衛生法に至った経緯は先の浅漬による食中毒事件が起きた事が発端となり、販売する場合この法律に従わなく製造すると処罰の対象となった。この営業許可を得るための申請期限は2024年5月までとなっている。その生産法人曰く、米だけの収入だけでは職員を養えない事と冬期の仕事確保のため「いぶりがっこ」をネット販売やスーパーなどに卸していたそうですが、この申請に応じるべく已む無く設備投資をしたそうだ。このように事業存続のために投資を決断する農業者もいるのだが、自宅で細々と加工・製造している多くの農家は新たな設備投資をするのを躊躇うと聞く。躊躇う大きな理由は年齢だ。平均年齢が70歳に近づく農業者が多いなかで今更高額な投資を回収出来るものか、と迷うのは当然の事だ。これは秋田だけにとどまらない。国内においても漬物を販売する全ての零細農家が対象となるため投資に見合わない場合その職を離す事態となるのだ。大げさかも知れないが「いぶりがっこ」や「野沢菜」を漬けてくれる方が少なくなると誰でも口に出来た漬物が高級食材と化し、いつのまにやら一般家庭の食卓から郷土の味が消えて無くなっていくのかも知れない。郷土料理の未来は如何に。

最強寒波が到来する予報ですね。日本一寒い北海道陸別町では寒さを逆手に取った「しづれフェスティバル」を毎年開催しているそうです。面白い町おこしイベントなので一度体験してみたいです。 編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>